

《一》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

冒険が批評だといわれても、多くの人は、はい？ と首をひねるかもしれない。批評というのはあくまで言論活動であり、身体行動である冒険とは行為形態が異なるように思えるからだ。しかし冒険にはまぎれもなく批評的性格がある。それもあり挑発的な批評性だ。

何度もいうが冒険とは脱※¹システムであり、脱システムするためには、①システムの性格や特質を自分なりにとらえ、そのシステムがどのあたりまで根を張っているのか、限界ラインがどのへんにあるのかを見極めなければ、越えるものも越えられない。ほとんどの冒険者は②これを意識せず直観でやっているが、意識的だろうと直観的だろうと、その行動が脱システムになっているかぎり限界ラインの見定めは必ずおこなわれている。

たとえば極夜探検では、現代社会では太陽が運行することを前提に生活がイトナまれている一方で、人工照明が発達して夜の暗さが薄れ、太陽のありがたさや闇の怖さが感じられなくなった世界に生きており、それがシステムとして起動しているという認識があることが前提になっている。こうしたシステムに対する理解があつて初めて、極夜という太陽のない世界こそ太陽のある現システムの外側であり、そこに到達することで現代システム内では失われた太陽のありがたみや闇の恐ろしさを経験できるだろうとの発想が生まれる。

このように脱システムするためには、われわれが暮らす日常がどのようなシステムの管理下にあるのかを、まず自分なりに見通すことができていなければならない。こうした認識や直観をもとに冒険者は境界を越えて脱システムし、そして無事、システムの内部に帰還した後に、自分が経験した冒険のあらましを文章やら動画やらで報告する。

③重要なのは、ここである。帰還した冒険者が公衆に対して何を報告し、どのようなことを明らかにするのかちよつと考えてみよう。脱システムした冒険者は境界を越えてシステムの外側に出ることで、④外側からシステムの内側を見るという視点を獲得している。月に向かったアポロのジョウインが地球の丸い輪郭線を目の当たりにしたのと同じように、外側に飛び出した冒険者も内側を眺めることで、必然的にシステムの境界線を見える。そして帰還した冒険者が公衆に向かって報告するのは、冒険の成果だけではなく、じつは彼が外側から目撃した現代システムの全体像でもある。というのも冒険を報告するということは、とりもなおさず冒険によつて越えられたシステムの境界線を明示することでもあるからだ。普段は見えてないけど、じつはここにシステムの境界線があつて僕はここを越えたんですねと示すことで、冒険者は現代システムの限界と内実をさらけ出すのである。つまり冒険には、外側に出ることで内側にいるだけでは気づかないシステムの現実を明らかにするという性格があることになる。システムの内側にいる者は、システムの外側に出た者の行動を知ることではじめて、システムの限界がどこにあるのかということ、いやそれ以前に自分たちがそのようなシステムの管理下にあつたことにはじめて気づかされる。それが冒険の批評性である。

そのことをもう一度、極夜探検を例に示してみよう。極夜の世界で私は北極星や月の光にすぎないようにして旅をした。しかし月の光は明るいようで太陽の光ほど完璧ではないので、惑わされるし、月の光を信じすぎたせいで※²ドツポにはまることも多く、そのうち月に対して呪詛の言葉を吐くようになる。そして闇の中の彷徨を始めて一カ月以上経ち身体も衰弱してくると、心身ともに疲弊して闇に対して恐ろしさを抱くようになる。しかし、そういうふうに月や闇に苦勞させられたからこそ、太陽が昇つたときに想像を絶するような開放感を味わうこともできる。要は極夜の世界で私は天体や闇という自然物に生かされるし、殺されもするという状況を経験したわけだが、おそらく私の旅の報告を読んだり聞いたりした人は、自分たちはこういう経験をしたこともないし、想像したこともなかったなあという感想を抱くと思う。つまり私は極夜というシステムの外側に飛び出し、外側から内側を照らすことで、内側にいるだけでは気づかなかったシステムの限界、つまりこの場合、天体や闇や光というものに本質的な反応を示すことができなくなった現代人の自然との断絶ぶりをあらわにすることになるわけだ。

このように、すべての冒険は、それが冒険であるかぎり脱システムしているわけだから、同じような批評性をかねそなえていることになる。

⑤シヨン・エリスは狼の群れの中で暮らし、狼の視点を獲得して狼を語ること、遠くから双眼鏡で眺めて狼の行動に人間の基準をあてはめるだけだった生物学の研究の限界を明らかにした。そしてそれは生物学云々という狭い世界だけにあてはまる話ではなく、この世界には人間が認知している世界とは異なる世界が、パラレルに存在していること、われわれが知りえている地球や宇宙が決してすべてではなく、そのほんの一部にすぎないことを身体的な経験として提示した。また服部文祥は、現代のテクノロジーに依存した登山スタイルでは自力性が乏しいと考え、そのような登山を自分がおこなっていることに我慢ならずサバイバル登山を始めた。このサバイバル登山自体が、生きることというのはほかの生き物を殺し、その肉を食べることにほかならないこと、

そして人間にはそうした原罪があることをあらためて明らかにし、そのことが他者を殺して生きていることへの意識が希薄になつた現代社会システムへの強烈な警鐘になつていのである。

先鋭的な^{※6}クライマーがヒマラヤの氷壁に一本の美しい^{※7}登攀ルートを描いて^cトウチョウウするとき、その行動もまた鋭い批評表現になつていいる。たとえば言葉で描写されなくても、クライミングをしない人には分からない世界であつても、そのクライマーが描いた一本の線の中には彼の世界観や、彼が見出した山や、彼がその山を手に入れるためにつづけてきた努力や、彼の思想そのものが込められており、ほかのクライマーはそのルートを見ただけで、それらが分かる。と同時に、その登攀を成しとげたクライマーには對他者的な視点もあつて、自分の登攀を知ったときにはほかのクライマーがどのような意味を見出すかも^dヨギしているだろう。クライマーは抜きん出た登攀をすることによって、抜きん出た登攀をした者としての自分をほかのクライマーに対して定位し、抜きん出た登攀をしなかった他者の限界を明らかにし、批評するのだ。

冒険とは批評的性格をかねそなえた脱システムという身体的表現である。そして冒険という批評行動はリアルな経験そのものなので、^{※8}ロジックや^{※9}修辭に頼らざるをえない言論による批評よりも強いインパクトをあたえることもできる。

同時に、冒険に批評的性格があるということは、冒険が社会性の非常に強い行為だということでもある。

今述べたように、冒険とはシステムの外に飛び出すことで、システムの内部を外から客観的に見つめて、その限界を明らかにする批評的性格を持った身体表現である。一言でいえば、ほかの人間に対して自分だけが飛び出す、自分だけが先に行くという行為だ。自分だけ外に飛び出すことによって、冒険者は「私は飛び出したけど、その飛び出した私について、あなたは思う？」そして飛び出さない自分たちについて何を思う？」と、飛び出さない者たちに対して挑発的な問いかけを発しているのだ。こうした行動に出る者に、飛び出さない他者たちに対する視点がないわけがない。

そして、このような公の空間での他者の目を気にした批評的性格を突きつめていくことで、冒険することの^eイギも見えてくる。

(角幡唯介『新・冒険論』より)

〈語注〉 ※1 システムⅡ体系。秩序・系統だった組織・制度。 ※2 ドツボにはまるⅡひどい状況に陥る。

※3 呪詛Ⅱのろい。

※4 彷徨Ⅱさまようこと。

※5 パラレルⅡ平行。

※6 クライマーⅡクライミングする人。

※7 登攀Ⅱ高い山や険しい岩壁をよじ登ること。クライミング。

※8 ロジックⅡ論理。

※9 修辭Ⅱ言葉を巧みに用いて美しく効果的に表現すること。

問一 傍線部①「システム」の外側での経験にあたるのは次のイ〜トの中のどれですか。あてはまるものをすべて選んで符号を書きなさい。

イ 人工照明が発達し、闇の怖さが感じられないこと。

ロ 北極星や月の光にすぎるようにして旅すること。

ハ 狼の群れの中で暮らし、狼の視点を獲得すること。

ニ 遠くから双眼鏡で眺めて人間の基準をあてはめる研究。

ホ 現代のテクノロジーに依存した登山。

ヘ 他の生き物を殺してそれを食べて生きている意識が薄いこと。

ト 太陽が昇ったとき想像を絶するような開放感を味わうこと。

問二 傍線部②「これ」は何をさしますか。二十字以内で答えなさい。

問三 傍線部③「重要なのは、ここである」とあるが、なぜ「ここ」が「重要」のですか。百字以内で説明しなさい。

問四 傍線部④「外側からシステムの内側を見る」とあるが、「システムの内側」にあたるひとまの表現として十字以上十五字以内の語句を傍線部⑤「ション・エリス」から始まる形式段落の中から抜き出しなさい。

問五 (1)筆者は極夜探検としてどのようなことをしたのですか。その行動の具体的内容を三十五字以内で説明しなさい。

(2)服部文祥はサバイバル登山としてどのようなことをしたのですか。その行動の具体的内容を三十五字以内で説明しなさい。

問六 波線部「冒険にはまぎれもなく批評的性格がある。それもあり挑発的な批評性だ」とあるが、冒険のという点が「挑発的」のですか。百二十字以内で説明しなさい。

問七 二重傍線部 a、e のカタカナを漢字に改めなさい。

《二》次の文章は、奥田亜希子の小説「クレイジー・フォー・ラビット」の一節です。愛衣は、自分に対する隠しことを敏感に、文字通りに嗅ぎ取ってしまうという、不思議な嗅覚を持っています。文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

白濁していた水は茶色やピンクが混じるたびに濁り、黒が溶け出したところで陰鬱な灰色になった。パレットをきれいに洗い流したのち、絵の具用の黄色いバケツを丁寧に濯ぐ。図工室の棚に描きかけの絵を置いて、筆箱やノートを片づけていると、下校の時刻を知らせるチャイムが鳴った。

「愛衣ちゃん、早くう」

すでにランドセルを背負った仁美と香奈恵が、出口で手招きをしている。今行くね、と、愛衣は急いでランドセルの蓋を閉めた。

①「来週どうなるんだろうね」

「アヤ、死ぬのかなあ」

「死なないう。主人公だし。それで、最後はやっぱシユウイチと付き合うと思う」

「シユウイチの記憶が戻るってこと？ 私はタクミとくつつくと思うけどなあ。っていうか、タクミのほうが断然格好いいのにな」

正門を出て右に曲がり、小さな商店が身を寄せ合う区画に行く。この道は、人通りが多いわりに幅が狭い。三人並ぶことは憚られて、②愛衣は仕方なく一歩下がった。仁美と香奈恵は、昨晚放送されたドラマについて喋っている。遅くとも十時には布団に入るよう騒がれている愛衣は、そのドラマを観られない。二人は後ろを振り返ろうとしなかった。

前方から漂う、甘さと酸っぱさの混じったあの匂いに、愛衣は呼吸を控えた。今日は随分と匂いが強い。なにかあったのだろうか。ふたつ並んだ赤いランドセルを見つめる。横のフックに提げた給食袋が、同じリズムで揺れている。

辻井さんが図エクラブだったらな、と、ふいに思った。実際、麻貴は器用だ。ノック消しゴムの先をカッターで削って作ったのだと、直径五ミリの判子を見せられたことがある。絵も得意で、大人びた漫画を好み、ときどきそれを模写していた。だが、麻貴の中に図エクラブという選択肢はなかったらしい。迷わずバドミントンクラブを選んだと前に言っていた。それに、たとえ同じクラブの仲間だったとしても、一緒に帰れたとは限らない。麻貴は一人を恐れない。さっさと一人で下校する姿が容易に想像できた。「香奈ちゃん、いつもタクミのほうが格好いいって言うよね。うちのお母さんに話したら、香奈ちゃんは不良っぽい子が好きなのねって言ってたよ」

「えー、タクミは不良じゃないよ。優しいよ」

仁美と香奈恵とは、四年生時のクラスが同じで親友になった。みんなで図エクラブに入ろうよ、と提案したのは愛衣で、二年続けて同じクラスになったときには、奇跡が起きたと抱き合って喜んだ。しかし、今年は愛衣が一组、二人が三組と分かれた。始業式の日には、私たちは三人でひとつだよ、と涙目で語っていた仁美と香奈恵も、日が経つにつれて、様子が少しずつ変わっていった。

信号を越え、八百屋の前を通り過ぎる。この先の交差点を、愛衣と仁美は右の郵便局方面に、香奈恵は左の住宅街に進む。一旦足を止め、じゃあね、と駆け出した香奈恵は、数メートル行ったらところで急に振り返った。

「仁美ちゃん、玉ねぎ忘れないでねー」

「分かってるよー」

仁美の応えに安心したように笑顔を浮かべて、香奈恵は再度駆けていった。黄色い通学帽の下で、二本のおさがが揺れている。

仁美は何も言おうとしない。愛衣は隣に立ち、

「玉ねぎって？」

と尋ねた。

「ああ。明日、四時間目が調理実習なんだ」

「もしかして、ハンバーグ？」

「そう。一組はもう作った？」

仁美が横断歩道を渡り始めた。愛衣もあとに続いた。

「まだ。来週の家庭科でやるみたい」

「そうなんだ。上手くできるといいね」

「そうだね」

沈黙。車が三台続けて横を走り抜ける。白、銀、白、と、③車体の色を見るともなしに目で追った。仁美となにを喋ればいいのか分からない。こんなこと、去年までは一度もなかった。なんでも話せる親友だったのだ。と、あの匂いが一段と濃くなったような気がした。愛衣がかすかにa眉根を寄せたそのとき、

「あら、仁美ちゃんと愛衣ちゃん」

郵便局から出てきた女性に呼び止められた。声の主は、香奈恵の母親だった。胸の前で手を振りながら、こちらに走り寄ってくる。香奈恵と同じ形の目には、焦りがにじんでいた。

「もしかして、香奈恵ってばもう家に向かつてる？」

「はい、今さっきあそこで別れました」

愛衣は振り返って腕を伸ばした。あの子、鍵を持ってないのよね、と母親が息を吐く。本当にさっき別れたばかりなんで、と応えた仁美から、あの匂いが急激に強く立ち上った。息が苦しい。喉がただれるようだ。思わず目を瞬きたくなる。愛衣はそれとなく顔を逸らした。

「それなら急いで追いかけてみるわ。二人も気をつけて帰ってね。あ、仁美ちゃん、昨日は美味しいチョコレートをありがとう。お母さんよろしくね。愛衣ちゃんもまた遊びに来てね」

一気にbまくし立てると、香奈恵の母親は大きく手を振りながら去って行った。ふたたびの沈黙。だが、数分前のものとは質がまったく違う。愛衣は横目で仁美の表情を窺った。浅く俯き、アスファルトを凝視している。④強風に吹かれたように、あの匂いはすっかり消えていた。

「愛衣ちゃん、あのね、違うの」

「なにが？」

とぼけた声音になればいいと思ったが、口から出てきた音は固かった。

「算数の宿題でどうしても分からないところがあって、香奈ちゃんに電話したら、うちで一緒にやろうって言われたのね」

「うん」

「愛衣ちゃんも呼んだほうがいいかなって思ったんだけど、でも、一組と三組じゃ宿題が違うし。そうしたら、仲間外れにしたいと思われるのも嫌だから、言わないでおこうって、香奈ちゃんが」

「別に気にしてないよ」

嘘だと自覚しながら応えた。本当は、胸の中には早くも黒い靄が立ち込めている。呼ぼうとしたって嘘なんじゃないの？ 私がいないほうがよかったんでしょ？ ⑤身体から靄が染み出さないよう、愛衣は両手を握り締める。仁美がcおずおずと顔を上げた。

「⑥本当にごめんね」

「いいって」

郵便局の先の駐車場で仁美と別れた。また明日ね、と精いっぱい明るく言った愛衣に、仁美が濡れた瞳で頷く。残りわずかな帰路を歩きながら、泣きたいのは私のほう、と、愛衣は路傍の石を蹴飛ばした。

問一 波線部a、cの意味を、次のイ、ホの中からそれぞれ選んで符号を書きなさい。

a 「眉根を寄せた」					b 「まくし立てる」				
イ	ロ	ハ	ニ	ホ	イ	ロ	ハ	ニ	ホ
敵意でにらみつけた	悲哀で目を見開いた	不快で顔をしかめた	困惑で歯ざりした	絶望で鼻をつまんだ	流ちょうに語る	横やりを入れる	話を切り上げる	勢いよくしゃべる	言いたい放題述べる

c 「おずおずと」				
イ	ロ	ハ	ニ	ホ
心乱れて戸惑いつつ	平静さを失って	元気が無い様子で	うろたえることなく	びくびくしながら

問二 傍線部①「来週どうなるんだろうね」「アヤ、死ぬのかなあ」の会話は、誰と誰の間で交わされたものですか。本文中から人物名を抜き出して答えなさい。

問三 傍線部②「愛衣は仕方なく一步下がった」とあるが、なぜ愛衣が下がったのですか。説明しなさい。

問四 傍線部③「車体の色を見るともなしに目で追った」とあるが、愛衣がこのように振舞っているのはなぜですか。次のイ、ホの説
明の中から最も適切なものを選んで符号を書きなさい。

イ 仁美が何かを隠していることを察して気にしながらも自分から聞くことができず、かといって他に共通の話題も見つからないために、間をもてあましたから。

ロ 香奈恵と別れた後の仁美が愛衣などいないかのようにふるまう意地悪げな態度をとったことに動揺し、当たり障りのない話題を探して話しかけようと必死になったから。

ハ 愛衣が仁美や香奈恵から離れて辻井さんと仲良くなろうとしていることを仁美に気づかれたと察し、気まずさのために現実逃避したくなったから。

ニ 麻貴といった方が安心できるし自分らしくいられるとは思うが仁美たちとの関係も壊したくはないため、自分のふるまい方に迷いどうして良いか分からなくなったから。

ホ 母親同士の関係から仲が良い仁美と香奈恵と違い、家庭の教育方針が異なる愛衣は仁美たちと付き合いを止めるように言われていたことを思い出し、悲しくなったから。

問五 傍線部④「強風に吹かれたように、あの匂いはすっかり消えていた」とあるが、どうして「あの匂い」は「すっかり消え」たのですか。次のイ、ホの中から最も適切なものを選んで符号を書きなさい。

イ 香奈恵の母と話したことにより仁美が愛衣と向き合う気持ちになったから。

ロ 香奈恵の母の言葉で仁美が香奈恵の家に行ったことが愛衣に知られたから。

ハ 突然の強い風によって、周囲のよんど空気ですっかり入れ替わったから。

ニ 愛衣の凝視で仁美は罪悪感に耐えられなくなり全てを話す気になったから。

ホ 仁美が贈ったというチョコレートが気になって、愛衣が悩みを忘れたから。

問六 傍線部⑤「身体から靄が染み出さないよう、愛衣は両手を握り締める」とあるが、ここでの愛衣の心情を、六十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑥「本当にごめんね」とあるが、この時仁美は何について謝っているのですか。三十字以内で説明しなさい。

〈三十五点〉

《三》次の①～⑮の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

① 彼に迷惑をかけるつもりなどモウトウなかった。

② 彼はヒルイなき強さで、名が知れ渡っている。

③ オリンピックが近いからといってコウフンするなよ。

④ 首相が欧州四カ国をレキホウする。

⑤ プロジェクトの方針が百八十度テンカイした。

⑥ 彼の当時の対応のカヒが問われることとなる。

⑦ ハチクの十連勝だ。

⑧ 彼はその知らせを受けてイサイ構わず病院へ駆けつけた。

⑨ トウキ目的で購入した仮想通貨が暴落した。

⑩ ゲキヤクを用いる。

⑪ ノウある鷹は爪を隠す。

⑫ 大臣のあの発言はイサみ足だ。

⑬ 大雨で大会の実施がノびた。

⑭ 人をサバけるほど君は立派な人間なのか。

⑮ コウゴウヘイカは「ジークス」シリーズの愛読者だ。

〈十五点〉

[illegible]